

## 自我体験に関する縦断研究<sup>1)</sup>

— 小学校高学年生・中学1年生を対象として —

天 谷 祐 子<sup>2)</sup>

### 問題と目的

小学校半ばから後半の時期を中心に、「私はなぜ私なのか?」「私はなぜ、他の時代ではなく、この特定の時代に生まれたのか?」というような、「私」への問いが見られることがある。ここでの「私」とは、「個々人が持つ特性や身体とは独立し、また生死を越えてなお存在可能とさえ想定される『私』という意識」である。この「私」を仮に「私1」とする。一方、「ここにいる、この時代にいる、このような体で、このような特性を持つ」ような「私」を「私2」とする。そのような観点から、先の「私はなぜ私なのか?」という問いを捉えなおすと、「私1はなぜ私2なのか?」という「私1」への問いをあらわしていると言える。このような「私1」について、先のような「なぜ?」という問いや、感覚的違和感を持ち始める体験は、いわゆる「自我体験」と呼ばれる現象である。

この「自我体験」についての実証的研究は、小学生を対象に自我体験と関連の深い質問項目を集めた質問紙により調査を行った宮脇(1984, 1986)の研究や、大学生を対象に、自由記述形式で自我体験の収集を行った渡辺(1992)の研究や、大学生を対象に自我体験に関する評定と自由記述を組み合わせ調査した渡辺・小松(1999)の研究が見られる。また、天谷(1998)は大学生を対象に、そして天谷(1997)は中学生60名を対象に、3つの下位側面を設定し(「存在への問い(例:私1はなぜ存在するのか、私1はなぜ私2なのか等)」、「起源・場所への問い(例:私1はなぜこの時代に存在しているのか、私1はなぜこの場所に存在しているのか等)」、「存在への感覚的違和感(例:私1はなぜ○○という名前なのか、私1と私2の身体との間の違和感等)」)、自我体験に

ついでに面接調査を行っている。さらに天谷(2000)は、小学校高学年生19名を対象に、自我体験についての面接調査を行っている。

以上のような自我体験についての調査における測定は、態度や性格特性等の測定とは異なり、その体験があったか、またはなかったかが、測定の決め手となる重要なものである。そして、質問紙調査であれ、面接調査であれ、過去にそのような体験があったかどうかを想起してもらい、体験を想起できる人には報告してもらうという形式で調査を行っている。よって、自我体験を報告してもらうには、現在におけるその人の過去の記憶に依存している。また、人によって体験時と調査時のタイムラグにはバラツキがあるので、かなりのタイムラグがある過去の体験を、調査においてきちんと報告できるのかどうかという問題点がある。これらを確認するには、縦断調査が有効であると思われる。ある調査により、自我体験を報告した人は、ある一定期間を経た後の調査においても、安定して自我体験を報告するかどうかを確認するのである。そうすれば、ある時点での自我体験の報告を、ある程度の信頼性をもった報告とみなしてよいのではなかろうか。

また、ある時期に見られた自我体験が、その後どのように当人の中で反芻され、考えられ、意味付けられているのかといった変化を追跡することは非常に重要であると思われる。自我体験にその後どのように取り組んでいったのか、また忘れられていったのかという経過を追跡することは、自我体験の位置づけを検討するのに有効であると思われる。

ところで、先述の自我体験に関する先行研究では、小学生を対象に面接調査を行ったものは天谷(2000)の研究のみである。自我体験の初発が、小学校後半から中学にかけてが多いという天谷(1998, 1997)の知見から考えると、自我体験の初発に近いその世代を対象として調査を行い、生き生きとした報告を収集することが望ましいと思われる。さらに、小学校後半から中学にかけての世代に、自由記述形式の質問紙のみで調査を行うのは、

1) 本研究の一部は、日本心理学会第64回大会において発表された。

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

文章作成能力や言語表現が不十分な可能性がある。よって、その報告が自我体験かどうかを判定するには限界がある可能性が高い。よって、まず質問紙法と面接法を併用して、小学校高学年・中学生に調査を行うことが望ましいと思われる。

以上から、本研究では、第1の目的として、小学校高学年生・中学1年生の世代を対象に、自我体験の調査からある一定期間後に、同じ体験内容を報告できるものなのか、そして報告できるのであれば、体験内容に発展が見られるかどうか、体験の意味付けに変化があるかどうかを検討する。また第1回調査において、体験を十分に報告できなかった人については、新たに自我体験に相当する内容を十分に報告できるかどうかを検討する。そして第2に、この世代の自我体験の内容や体験率を検討することを目的とする。よって研究1では、小学校高学年生を対象に行った天谷（2000）の面接調査から1年の間隔をあけて、同じ被面接者に縦断調査を行う。そして、研究2では、小学校高学年生・中学1年生を対象に、面接法により、自我体験の体験率、報告される自我体験の内容について検討する。これらを通して、小学校高学年生・中学1年生の世代の自我体験の位置づけについて考察する。

なお、ある体験が当人によって本当に体験されたものかどうかを、外部から正確に把握することは困難である。本研究では、その体験が、本当に当人に体験されたかどうかではなく、その人が「体験した」と思っていることが、その後安定して報告されるかどうかを検討するものである。

## 研究 I

### 目的

天谷（2000）で対象となった面接調査対象者について縦断調査を行い、第1に、報告が第1回面接調査と同じような体験を報告するかどうか、第2に、当人にとってその体験の重要さや意味付けがどのように変化するかについての検討を行う。

### 方法

**対象：**天谷（2000，調査実施1999年3月）で対象となった面接調査対象者19名のうち、第2回面接調査にも参加した小学校5・6年生，中学1年生13名（男6名，女7名，内訳中学1年10名，小学6年1名，小学5年2名）。  
**調査時期：**2000年3月

**手続き：**質問紙（質問項目と自由記述）に記入後，1対1の半構造化面接により，自由記述内容や，質問項目で高い評定をつけた項目について，詳しい内容を質問する。

その後，第1回の面接調査結果を被面接者に提示し，今回話してくれた内容と比較した（第1回の話と今回の話で同じものはあるのか，第1回から新たに考えたり，発展させたりしたかどうか，意味付けに変化があるかどうか）。

**質問紙：**自我体験の例を集めた質問項目（15項目，項目は付表参照）について，「思ったことがある」「何となくあったような気がする」「思ったことがない」の3件法に評定を求めた。その後，1番思ったことのある項目について，どんな時，どのように思ったかについて，自由記述形式での記入を求めた。この質問紙は，第1回調査における質問紙の語尾のみを変更した以外は，第1回調査における質問紙と同じものである。

**面接データの整理：**面接記録を逐語録に起こし，各被面接者のローデータとした。そして，各被面接者を，「体験群」「あいまい群」「未体験群」の3群のいずれかに分類した。「体験群」とは，質問紙の自由記述内容や面接での発言が，自我体験とみなせる群である。「あいまい群」とは，質問紙の自由記述内容や面接での発言が，自我体験とみなすにはあいまいであったり，言語表現が不十分であったりする群である。「未体験群」とは，質問紙・面接双方において，自我体験に相当するような体験について「思ったことがない」と発言したり，自我体験ではない体験について話したりした群である。すべての被面接者のローデータについて，筆者と心理学を専攻している大学院生（1名）が独立して分類を行った。その結果，一致率は3つの体験群の分類については70.0%，第1回面接と内容が同じかどうかについては76.9%であった。なお，第1回調査における13名の内訳は，「体験群」は8名，「あいまい群」は4名，「未体験群」は1名であった。

### 結果

#### 1. 3つの体験群の分類結果

得られた13名の面接データの整理を行った結果，「体験群」は6名，「あいまい群」は4名，「未体験群」は3名であった。

Table 1 縦断調査によるカテゴリの移動

	第1回	→	第2回	人数	(うち) 報告内容が同じ
変化なし	体験群		体験群	5	4
	あいまい群		あいまい群	3	1
	未体験群		未体験群	1	1
変化あり	体験群		あいまい群	1	1
	体験群		未体験群	2	0
	あいまい群		体験群	1	1

2. 面接内容についての第1回調査との比較

本研究の結果、第1回調査時と同じ内容の報告をした人は8名であった（Table1参照）。しかし、説明の十分さの度合いにバラツキが見られ、3つの体験群のカテゴリ（以後カテゴリと表記）の分類について、第1回調査時からの移動が見られたり見られなかったりした。よって以後、カテゴリの移動があったかどうかによって区分し、結果を示していくこととする。

(1) カテゴリの移動がなかった群

第1回調査と第2回調査の間でカテゴリが移動しなかった群は、9名であった（「体験群」5名、「あいまい群」3名、「未体験群」1名、Table1参照）。この9名の中で第2回調査時の「体験群」5名のうち、第1回面接時と同じ内容の話を報告したのは4名であった。さらにそのうち3名は、第1回面接時よりも体験内容が発展して

いると報告し（例はTable2-1参照）、残り1名は第1回面接時から体験内容は発展していないと報告した（Table2-2参照）。

また第1回調査時と異なる話を報告した3名（「体験群」1名、「あいまい群」2名）はすべて、第1回調査時の自身の報告内容を提示された後、昔はその内容について考えていたが、今は考えないと報告した（例「（去年の話は）何となく覚えてる。この時はこれが一番強かった。…今はそこまではあまり気にしなくなった。全然考えていないんで（「あいまい群」の例）。」、「体験群」の例はTable2-3参照）。彼らは第1回調査時に報告しなかった話によって、第1回調査時と同じカテゴリに分類された。

(2) カテゴリの移動が見られた群

カテゴリが移動した群は4名であった。この4名のう

Table 2 縦断調査による報告内容の変化

Table 2-1 第1回調査時「体験群」→第2回調査時「体験群」（第1回調査時と同じ話で、第1回調査時よりも内容が深まったケース、中1女）

	第1回	第2回
項目番号	1, 10	12, 14
体験内容 (自由記述含)	(1番は)自分はどこから来たのだろうって言ったら、生まれてからやと病院からやけど、それよりも前で、まだ、なんていうか、たましいのとき。どこから来たんやろうって。(10番は)たましいだったら、なんで私の中に入ってきたのかというか。…入ったら自分は、違う人になってたり、うん。違う国で生まれたり、そういうことになってたかもしれないけど、うん。たましいだったら、なぜからだに入ってきたのか。	なぜ私のたましいみたいなものが、私の体をえらんだのか、私はまあ知らないけど、それはちょっと、なんで、なんか、たましいと体が分離してるってなんか、テレビでそういうのをやっているのを見たことがあって、なんか、私のたましいって、いったいどうやって、うちの体の中に入ったのかなって、そういうことで。科学的にも思ってるんですけど、私は、私の魂は、ほかのだからにはいなくて、私にきたのは、何か理由があるような気がするんですよ。
下位側面	存在への問い、起源・場所への問い	存在への感覚的違和感
体験年齢	小学4年	うーん、わからん。でも、小学校の中学年、ぐらいのときか、なんか、ものごころがちゃんとして、自分の考えがちゃんと言えるようになったくらい
意味付け	—	意味はまあちょっとはあったと思います。私は私であってよかったなって。
第1回と比較		“同じ話。忘れてた。…ちょっと思い出して考えたことはあった。(意味は)だんだん成長していくにつれて、変わっていくと思います。(どういうふうに変わってきたかな?)最初は、私は生まれたんやという感じで、どうやって生まれたんかといえば、病院とかお腹の中からとか、最初は言っていたけど、だんだん考え方がかわってきて、魂はどこから入ってきたんだろうとか、かわってきて、それが、今だったら、私が、今生きているということは、私が生きているということは、他の人たちも、私と同じようなことがおきているということだから、私が私であることは、すごく大切なことなんじゃないかとか、そういうことで。(去年のこのころは、そこまで考えていなかったのかな?)あんまり意味がわからなくて。

注)「項目番号」とは、質問紙のどの質問項目についての発言かを示したものである。  
括弧内は、面接者の発言もしくは筆者の補足である。

自我体験に関する縦断研究

Table 2 - 2 第1回調査時「体験群」→第2回調査時「体験群」(第1回調査時と同じ話かつ発展がないケース、中1女)

	第1回	第2回
項目番号	8	1, 7
体験内容 (自由記述含)	自分は どうして生まれたのかなって。(生まれてきた理由みたいな感じ?) はい。	何かぼーっとしている時とかに、思ったりする(自由記述)。(1は)ぼーっとしているときとかに。あんまり思い出せない。(7は)ぼーっとしている時とかに、なんか、思うことが多くて、自分って何で、何だろうって。
下位側面	存在への問い・起源・場所への問い	存在への問い
体験年齢	小学後半	ずーっと前で、あんまり覚えてない。…高学年かな
意味付け	—	ない。
第1回と比較		(去年の8番の話は今日の)7番の話と同じ。(去年から今日まで思ったことはあるかな)ないと思う。(じゃあ今日まで忘れてた?)うん。

注)「項目番号」とは、質問紙のどの質問項目についての発言かを示したものである。  
括弧内は、面接者の発言もしくは筆者の補足である。

Table 2 - 3 第1回調査時「体験群」→第2回調査時「体験群」(第1回調査時と異なる話を報告したケース、中1女)

	第1回	第2回
項目番号	8	7, 3, 4, 8, 9, 10
体験内容 (自由記述含)	自分が本当に自分なんやろうかって、なんか、急に思った。本当は違う人なんじゃないか、昔は自分の中にいる自分が他の体を借りて、生きているのかなって。…友達に冗談で「私って、本当に私なんか?」って聞いたことはある。…もしも他の時代じゃなかったら、今の私はいるんだろうかって。	7は何でここにいるのかなって。もういっこ上の学年かもしれないし、もういっこ下の学年かもしれないし、何で自分がここにいるのかも、わからん。
下位側面	存在への問い・起源・場所への問い	起源・場所への問い
体験年齢	4, 5, 6年生	小学校中学年か高学年。一番よく思ったのは中1。
意味付け	—	あんまりわからんけど、何となくあったような気がする。感じるから。
第1回と比較		(前は8番。今日話したこととはかぶっていない?)うん。(じゃあ、これ(去年の話)今はあまり思い出せない?)えー、ちょっと。(じゃ、こうやって考えていたことは、もう消えちゃった?)今聞かれたら大体3番で、こういうことはあんまり思わない。…もう答が出ないからあきらめたっていうか。(こっちは昔思っていたことで、今日話してくれたことは、最近思っていること?)うん。(意味をつけたりとか。)そう簡単にはみつからない。…考えてもわからんし、一生懸命考えても、答が出ないし。

注)「項目番号」とは、質問紙のどの質問項目についての発言かを示したものである。  
括弧内は、面接者の発言もしくは筆者の補足である。

ち、第1回調査時に「体験群」に分類され、第2回調査時に「未体験群」に分類された2名は、共に第1回調査時の面接内容を完全に忘れていた。うち1名は第1回調査時において、その被面接者自身の自我体験内容に相当する質問紙の質問項目に、第2回調査時には「思ったことがない」と評定した。そして自我体験とは異なる話を

報告した(Table 2 - 4 参照)。また残りの1名は、第2回面接時において、第1回面接時の内容を「違う」と報告し、第1回面接時に報告した体験を「あったような、なかったような」と報告した。

また、第2回調査時に「体験群」から「あいまい群」に移動した1名は、第1回調査時と報告内容は同じであっ

Table 2-4 第1回調査時「体験群」→第2回調査時「未体験群」(中1女)

	第1回	第2回
項目番号	12	14
体験内容 (自由記述含)	授業の時、こういうのが話に出てきたから思いました(自由記述)。生まれてくる時になんで、私はこの家庭とかに生まれて、この体で生まれてきたんだろうって、不思議に。なんで私は、まだまだいっぱい体があったはずなのに、なんでこの体でやってきたのかって、すごい不思議で。	親とけんかしたとき。なぜわたしはこの家に生まれたのかな。(素朴にいやなことじゃないときに思うときは?)ありません。
下位側面	起源・場所への問い、存在への感覚的違和感	×
体験年齢	小学5年	—
意味付け	多分、大人に成長したんじゃないかな。	—
第1回と比較		(去年は12番。去年の話と今日の話は違うこと?) はい。(去年の話は大体はもう忘れちゃってる?) はい。(こういう風に思ったのは最近はどうほとんどないのかな?) はい。あんまりないです。(こういう意味があったんじゃないかと思うとか、そういうのは?) やっぱ、これを何か思うって言ったら、なんとなくは、さっぱりした。こういうことって人に言わないから。だからなんか、あんまり考えなくなったら、うん。(こういう意味があったんじゃないかとか、そういうのは?) はい。ないです。…やっぱこれは、いつになっても大事だと思う。大事やと思うけどあんまり考えなくなった。多分また、赤ちゃん産むときとかにやっぱ、生んだときとか考えと思う。(じゃあ何らかの意味はあったと) はい。(去年の話と今日の話とはつながっていないの?) はい。

注)「項目番号」とは、質問紙のどの質問項目についての発言かを示したものである。  
括弧内は、面接者の発言もしくは筆者の補足である。

Table 2-5 第1回調査時「あいまい群」→第2回調査時「体験群」(中1男)

	第1回	第2回
質問項目	とくになし	8, 15, 12
体験内容 (自由記述含)	思う。存在が不思議。…うーん。	自分は本当に自分か?とわからなくなった。アニメとかニュースで、クローン人間が出てきたとき、自分もクローンじゃないか?と思った(自由記述)。他に自分みたいな人がいたら…(15, 12番は)自分はどこから来たのだろう。どこから来たんやろうって。どこから?うーん。最初は他の時代に生まれていたらどうなっていたんだろうというのを友達とかなり長く話して、どんどん。…(なんでこの体を選んだのかとかも、つながってくる?)この体が、えっと…どこから来たのだろう。
下位側面	説明不足によりあいまい群。	存在への問い(△)起源・場所への問い(○)
体験年齢	—	小学校高学年
意味付け	—	ない。
第1回と比較		同じ内容です。(去年のこのころから、久しぶりだった?)久しぶりでした。(意味が変わったとかそういうわけではない?)うん。

注)「項目番号」とは、質問紙のどの質問項目についての発言かを示したものである。  
括弧内は、面接者の発言もしくは筆者の補足である。

たが、体験内容を十分に説明できなかった。また第1回調査時の内容をあまり覚えておらず、自我体験に相当する内容については、第1回調査時の方が覚えていたと報告した。

さらに、第2回調査時に、「あいまい群」から「体験群」に移動した1名は、第1回調査時には「存在が不思議」という一言以外は、言葉の説明ができず、「あいまい群」とされた。第2回調査時には、第1回調査時と同じ内容について、ある程度説明ができ、「体験群」とみなされた (Table 2 - 5 参照)。

### 3. 「体験群」の意味付けや重要さの変化について

自身の自我体験の意味付けについて、Table 2 - 1 の被面接者が、第1回調査時には体験の意味はわからなかったが、第2回調査時には意味を考えるようになったと報告した。しかし、このケース以外のほぼすべての被面接者が、「意味はない、ただ考えただけ」というような意味を見出さない報告や、「なんとなく意味があったような気がする」というような、意味がなくはないが漠然としている報告をした。また Table 2 - 3 の被面接者のように、「答えが出ないので意味はそう簡単には見つからない」といった報告も見られた。

### 考 察

研究 I の結果、自我体験を経た後に、たとえその内容を普段忘れていたとしても、期間を経て質問した場合には、説明の十分不十分さの違いはある程度あるけれども、自身の過去の自我体験を想起できることが示された。しかし、過去の自身の体験を忘れていたり、現在の中心的な考え事しか想起できない場合も、少ないながら見られることが明らかになった。また、カテゴリの移動が見られなかった人が多かったことを考えると、第1回調査時に報告された内容以外の、自我体験やそれに近い内容についても、考える人は次々と考え、ぼんやりとした状態で考える人は、あいかわらずぼんやりとした状態で次々考え、そして考えない人は相変わらず考えない、ということが考えられる。その中で、あまり印象的でない自我体験を経た人や、自我体験の問いに取り組んだピークを過ぎた人については、第1回調査時の報告内容と同じものについての記憶が想起しにくくなる場合があるのではないかと思われる。

そして自我体験の意味付けについては、小学校後半から中学1年という時期においては、体験の意味まで考えることはあまりないことが明らかになった。宮脇 (1986) は、小学校5・6年の時期について、「それまでの体験を、新しく獲得しつつある自我の内省的働きによって、自分なりに再構成し、意味づけていく過渡期である

と述べている。この宮脇 (1986) の視点から考えてみると、小学校後半の時期は、自らの体験の意味を考えはじめるまさに渦中もしくは途上にあり、体系的に組み立てて言葉でうまく表出しづらい時期と考えられる。この世代の人は、さまざまなことを考えてはいても、客観的に自身のそのような体験を見つめたり、その意味を考えたり、自分の中で反芻して位置づけたりするところまでは及ばないのかもしれない。その場合、もう少し後の時期でないと体験の意味が明確にならない可能性がある。

## 研究 II

### 目 的

小学校高学年生・中学1年生を対象に自我体験の面接調査を行い、自我体験の報告される割合やその内容について検討する。

### 方 法

対象：研究 I の対象者を含めた小学校4～6年生・中学1年生30名 (男14名、女16名、内訳小学4年4名、小学5年5名、小学6年6名、中学1年15名)

調査時期：2000年3月 (研究 I と同様)

手続き：質問紙 (質問項目と自由記述) に記入後、1対1の半構造化面接により、自由記述内容や、質問項目で高い評定をつけた項目について、詳しい内容を質問する。  
質問紙：研究 I と同じ質問紙を使用した。

面接データの整理：研究 I と同様、面接記録を逐語録に起こし、各被面接者のローデータとした。そして、各被面接者を、「体験群」「あいまい群」「未体験群」の3群のいずれかに分類した。

### 結果と考察

#### 1. 自我体験の報告される割合

得られた面接データの分類を行った結果、「体験群」は12名、「あいまい群」は8名、「未体験群」は10名であった (体験率 (体験群/全被面接者) は40.0%)。小学校高学年生19名を対象とした天谷 (2000) の面接調査結果では、「体験群」は10名、「あいまい群」は4名、「未体験群」は5名であった (体験率52.6%)。また、中学1年から3年60名を対象とした天谷 (1997) の面接調査結果では、「体験群」は38名であった (体験率63.3%)。うち、中学1年生については、18名中9名が「体験群」であった (体験率50.0%)。

また、対象人数が少ないけれども、本研究の結果を学年別に見てみると、中学1年の15名のうち8名、小学6年の6名のうち2名、小学5年の5名のうち2名、小学

Table 3 「体験群」とみなされた被面接者の自由記述と面接における発言

項目番号	自由記述	発言内容	下位側面	学年 性別
12, 14		なぜ私のたましいみたいなものが、私の体をえらんだのか、私はまあ知らないけど、それはちょっと、なんで、なんか、たましいと体が分離してるってなんか、テレビでそういうのをやっているのを見たことがあって、なんか、私のたましいって、いったいどうやって、うちの体の中に来たのかなって、そういうことで。科学的にもおもって。で、こっちの14番は、12番とちょっと似てるんですけど、私は、私の魂は、ほかのだれかにはいなくて、私にきたのは、何か理由があるような気がするんですね。	感	中1 女
15, 12		自分はどこから来たのだろうって。どこから？なんやろう。…一番最初は15番。…この体で一生いくんだろうなって。	起	中1 男
15, 9	何かすることもなくて、ただぼんやりとしているとき、15番を考える。他にも200ほどの国々があるのに、日本に生まれてきたことには何らかの理由があるのだろうか。またそれには、運命めいたものがかんけいしているのだろうかということを考える。それと関係して、「人生とは自分が切り開いていくものなのか、それとも神という存在が決定していくのかとも考える	始まりは15番。…今まで生きてきた中で、今まで生きてきた人生が、運命だったのか、それとも自分で選択してきたのか、(そしたらいろいろな考えが出てきた)…最終的に15番になる。今まで生きてきたものは、運命だとしたら、自分はどこから来たのかって言うのも、どこから来たんだろうとか、そういう風に。で、そこから、運命だったら、自分はこれからどこへいくのだろう。	起	中1 男
7	なぜ自分で生まれてきたのかが不思議だと思う	どうして自分、自分でないといけないのか	存	中1 男
3, 14, 4, 7, 8, 9, 10	3がよく思います。悲しい時、つらい時そう感じます。悲しい時に、自分は何のために生まれてきたのか、誰のためなのかと考えると自分とはなんだろうと思います。	(悲しくないときになんだろうって思うことは)ない…(何で私は私なんやろうとか)あんまり深く考えないけど、ちょっとはある。…3は悲しい時で、14は人がうらやましいとき。…7は何でここにいるのかなって。もういっご上の学年かもしれんし、もういっごこの学年かもしれんし、何で自分がここにいるのかも、わからん。	起	中1 女
1, 7	何かぼーっとしている時とかに、思ったりする。	(1は)ぼーっとしているときとかに。あんまり思い出せない。(7は)ぼーっとしている時とかに、なんか、思うことが多くて、自分って何で、何だろうって。	存	中1 女
9, 3, 4, 5, 7, 11, 14	私は9を一番強く、日ごろから思っています。私は、たましいというものは、限りがあって、それが何回も生まれ変わってきているのだと思います。すると私は前世この魂で違う人だった。それではどうして現世私は○○(被面接者の名前)として、生を受けてきたのだろうと疑問に思うのです。私が死んだ後、またしばらくすれば、私の魂が○○(被面接者の名前)とは違って生まれてくるのです。それを思うと、自分はなぜ自分なのだろうと考えるのです。	はじめは思うだけで、言葉にするのが難しかったけど、ずっと考えていって、どういう風に表現していったらいいかとか、お母さんに話すので、どういう風に言ったらいいのかなということで、具体的になった。	存・起	中1 女
15, 1, 2	15番の問題を強く思った。世界のニュースを見ているとき	戦争とかをしていると、日本って平和やなって。時代的に。…寝る前ひまなときになるとそういうことを思うときがある。…(1, 2は)ゲームなんかしていると、私はどこからきたのだろうというのが出てくる。(それを見て考えた)(生まれる前のことを)わからんって。始まりは違うけど、結果的に15番と同じ考えになってしまう。…来たのは、もう来てしまったから、この後どこへ行くのかなというのは、よく考える。死んだら、もとへもどっていくのかなっていうのは、うん。…自分はまた行って、戻ってくる。またここからこう、繰り返したと思う。	起	中1 男
3, 6	勉強しているとき、ふと自分はいったいなんなんだろうと思ったことがある。	なんとなく自分がなんか、なんなんだろうっていう。…自分自身がなんなんやろうって。…何も言わんとただそのことをずっと考えて、それで、あってなつてまた元に戻って。…うーん、だれなんだー？自分の存在がなんなんやろうって。…ほんとに存在するのかって。	存	6年 男
7		何で自分が生まれてきたのかなとか、もし生まれてこなかったら、自分はいなかったんやとか、時々思う。…私がいなくて友達が生きていたら、今ごろ何しているかなって。	孫	6年 女
13	たまたま私なのだとふと思ったことがある。	はじめに13番が、いろんな人がいるのに、なぜたまたまぼくなんやろうと思った。その次に、10番の、自分が自分であることが不思議だと思った。	存	5年 男
7		なんか、いまここにいるっていうか、自分がそこに生まれてきている感じが、少し不思議に。…(いたのは何でだろうって考えて、でも自分はいるから、うれしいわで終わり)	存・起	5年 女

注) 存: 存在への問い、起: 起源・場所への問い、感: 存在への感覚的違和感を示している。

「項目番号」とは、質問紙のどの質問項目についての発言かを示したものである。

括弧内は、面接者の発言もしくは筆者の補足である。

1人複数体験の場合は、うち1体験のみ記載した。

4年の2名のうち0名が「体験群」であった。天谷(2000)の学年別の結果では、小学6年の14名のうち7名、小学5年の3名のうち1名、小学4年の2名のうち2名が「体験群」であった。

以上から、本研究の結果は、総合の体験率では今までの調査結果よりもやや低い値となった。しかし、中1だけを見ても約半数から自我体験が報告され、今までの調査結果とほぼ同じ結果となっている。本研究では、小学校高学年の対象人数が少ないので、小学校高学年の体験率が安定していない結果なのかもしれない。今までの調査結果と本研究の結果とをあわせて考えると、少なくとも中学1年以降になると、安定して約半数前後の人から自我体験が報告されるものと思われる。

## 2. 報告された自我体験の内容

被面接者から報告された自我体験の内容を Table 3 に示した。小学校高学年生・中学1年生の世代による、自分の言葉で表現された、生き生きとした自我体験が報告されている。例えば、Table 3 の上から7番目の被面接者については、「私1（この被面接者の場合は「たましい」と表現している）」について、お母さんと話しながら、自分なりに答を出そうと取り組んでいる様子がかがえる。

また下位側面の分類の結果、「存在への問い」は9体験、「起源・場所への問い」は7体験、「存在への感覚的違和感」は1体験見られた（1人に複数の下位側面にまたがる場合もあった）。小学校高学年生19名を面接対象とした天谷(2000)の結果では、「体験群」「あいまい群」あわせて14名中、「存在への問い」が6体験、「起源・場所への問い」が10体験、「存在への感覚的違和感」が2体験見られた。また中学生60名を面接対象とした天谷(1997)の結果では、「存在への問い」が36体験、「起源・場所への問い」が20体験、「存在への感覚的違和感」が10体験見られた。「存在への問い」が多く、「存在への感覚的違和感」が少ないという本研究の結果は、中学生を対象とした天谷(1997)の結果と同じ傾向を示していると思われる。しかし本研究の結果は、天谷(1997)よりも「起源・場所への問い」がやや多い。小学校高学年生を対象とした天谷(2000)の結果が、「起源・場所への問い」が多いことともあわせて考えると、小学校高学年の頃は「起源・場所への問い」がやや多く見られるという可能性も考えられる。

## 総合考察

本研究の結果、第1回調査後1年を経ても、多くの人には第1回調査時に話した内容と同じ報告をした。これにより、小学校高学年・中学1年生であっても、少なくと

も1年のブランク後でさえ、ある程度の人自身が過去の体験を報告できることが明らかになった。よって、初発からかなり長い時を経ても、ある程度正確に想起できる可能性があることが示された。しかし、体験時の強さやその人の考えた頻度、その人にとっての重要度によっても、その後に想起できる度合いが異なってくると思われる。また、自我体験の位置づけや取り組み方にも、人によってバラツキがある結果となった。よって、自我体験がこの世代の人に与える影響も、かなりのバラツキが見られると思われる。

また縦断調査による自我体験の意味付けや重要さの変化については、大部分の人が相変わらず「意味がない」といった報告をした。研究Ⅰでは、この世代の人は、自らの体験の意味付けにはまだ至らないのかもしれないと考察した。しかし、研究Ⅱの結果、この世代の人にとっては、自我体験はかなり身近なものと思われる。よって、彼らにとっては自我体験があまりにも身近でありすぎて、それを特別視せずにその意味や重要さを特に考えることがないということもあるのかもしれない。

また本研究の結果、実際に小学校高学年から中学1年生の人に、自我体験が見られることが明らかになった。自我体験の問いの内容は、哲学的な意味合いが強い。村本(1994)は、自己についての考え方として、「人格の同一性を可能にし、保証するものとして、従来の常識は魂といったなんらかの形而上学的実体を仮定してきた」と述べているが、自我体験の「私1」もそのような仮定の上の産物である。そして、そのような「私1」について問う場合は、答えが出るわけではない(西, 1996)。しかし、そのような問いが、一般の子どもに、素朴に考えられているのは、非常に重要な知見である。このような「私1」への問いを通して、「私」や、世界についての枠組みを考えたり理解したりするきっかけともなるとと思われる。自我体験は、すべての人に見られる現象ではない可能性が強いけれども、「私1」について疑問や違和感を感じることなく無自覚なままではいるよりは、その後自我の基盤が強く形成されていくのではないかと思われる。

## 今後の課題

本研究の結果、「未体験群」から「体験群」へと移動した人は見られなかった。本研究では、第1回面接時に「未体験群」であった人は1名と少なかったため、最近1年間に新たに自我体験を経た人にアプローチすることはできなかった。よって、ごく最近自我体験を経たという人にアプローチし、「まさに現在考え中」の人がどのように自我体験の内容に取り組んでいるのかについては



わからないままとなった。そのような被面接者に出会う可能性は低いけれども、今後そのような人にアプローチしていくことが今後の課題であろう。

また、本研究の結果、小学校高学年生であっても自我体験を報告できる被面接者は、少ないけれども存在した。よって、先の問題点ともあわせ、小学校高学年生を対象にさらに面接調査を進め、自我体験の報告を収集することが望まれる。

## 文 献

- 天谷祐子 1997 「自分」というものへの気づきはいつ頃なのか？ 日本発達心理学会第8回大会発表論文集, p. 138.
- 天谷祐子 1998 「自分」というものへの気づき」現象に関する探索的研究：大学生による自我体験の報告から 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）, 45, 75-82.
- 天谷祐子 2000 自分に関する「なぜ？」という問いを子どもはどのように体験するのか？—小学生への自我体験の報告より— 日本発達心理学会第11回大会発表論文集, p. 250.
- 宮脇恭子 1984 思春期女子における自我体験の様相 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 418-419.
- 宮脇恭子 1986 自我発達における小学校中学年の位置づけ(2)：自我体験度を通して. 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 372-373.
- 村本詔司 1994 内省の事実から出発する—ジェームズの主我と客我論 梶田毅一（編）, 自己意識心理学への招待（Pp 80-90）
- 西研 1996 哲学のモノサシ 日本放送出版協会
- 渡辺恒夫 1992 自我の発見とは何か：自我体験の調査と考察 東邦大学教養紀要（東邦大学一般教養科）, 24, 25-50.
- 渡辺恒夫・小松栄一 1999 自我体験：自己意識発達研究の新たな地平 発達心理学研究, 10, 11-22.  
(2001年9月20日 受稿)

## ABSTRACT

### A longitudinal study on “ego-experience” in childhood

Yuko AMAYA

This paper reports on research regarding “ego-experiences,” which appear from post-childhood to pre-adolescence, occur around the concept of “I,” as in “Why am I ‘I’?,” “Why do I exist?,” “Where did I come from?,” or “Why was I born at this particular time rather than at a different point in time?” The purpose of this study was to examine reports of “ego-experiences” by children. Study 1 is a longitudinal study of 5th to 7th-grades (N = 13) who participated in individual semi-structured interviews stimulated by a questionnaire (Amaya, 2000). Results indicated that 5 out of 8 participants reporting “ego-experiences” in Amaya 2000 reported “ego-experiences” in the new study as well. 9 participants remained in the same categories. Study 2 covered 4th to 7th-graders (N = 30), some of whom had participated in study 1. 12 participants reported on their “ego-experiences.” Results indicate that children can report their past experiences properly and think about their concept of “I.”

Key-word: “ego-experience”, semi-structured interview, children

付表 面接に先だって行われた質問紙の質問項目

---

1. 自分はどこから来たのだろうか，と疑問に思った。
  2. 自分はどこへ行くのだろうか，と不思議に思った。
  3. 自分は何だろう，とふと思った。
  4. 自分はだれだろう，と考えた。
  5. いったい何が「自分」なのだろう，とわからなくなった。
  6. 自分の正体って何だろう，と不思議に思った。
  7. 自分の存在そのものが不思議だ，と思った。
  8. 自分は本当に自分か？と，わからなくなった。
  9. 自分はなぜ自分なのだろう，と疑問に思った。
  10. 自分が自分であることが不思議だ，と思った。
  11. だれでもなく，どうして自分なのだろう，と考えた。
  12. なぜ私はこの体をえらんだのか？と不思議に思った。
  13. いろんな人がいるのに，なぜたまたま私なのだろう，とふと思った。
  14. 私が私でなく，他のだれかとして生まれてもいいのに，どうして私となっているのだろうか，と不思議に思った。
  15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく，たまたま日本の，この時代に生まれたのか，わからないなあと思った。
-